我はいかにして途上国学徒となりしか

塩田 光喜

◉第一四話　虫瞰と鳥瞰の交錯（二）―第一次世界大戦から米騒動へ―

尋常高等小学校を卒業するとすぐ、祖母キクは姉のヨッセさんとともに、倉敷に女工に行く。祖母は一九〇五年の生まれだから、おそらく一九一八年か一九年。第一次世界大戦は終わり、大戦特需は消え、日本は景気後退期に入っていたはずだが、女工の需要は衰えていなかったようだ。

紡織工場の寮には、中四国から集まってきた少女達が寮生活をしていた。「女工哀史」の光景である。労働は厳しかったろうが、少女達は打ちひしがれていたわけではない。

「東京に行ったら、洋裁学校があるんやと」「うちも東京行って洋裁習て、洋裁の先生になりたいわぁ！」

少女達は就寝前の一時、夢を語り合っていたのだ。

だが、まもなく、祖母とヨッセさんは仁尾へ呼び帰される。父、慶吾の商売が軌道に乗り始めたのだ。

それは、祖母の三歳年下の弟、重明が尋常高等小学校卒業後、県都高松の高松商業中学（現在の高松商業高校）に進学したことからも窺える。教育社会学者の竹内洋によれば、戦前、中学校へ進学できたのは資産家の子弟に限られたという。

だとすれば、祖母の尋常高等小学校卒業から重明の卒業の三年間に、泰田の家は、娘達を女工に送らねばならない経済状態から息子を上の学校（中学）へ送れる資産家へと浮上していたということになる。一九一八年から一九二一年の間のでき事である。泰田の家は、盛運に向かっていたのである。

片山によれば、一九一八年は日本全国（一道三府三二県）で米騒動が勃発した年である。一九一四年の暮れに一石一一円八五銭だった米価が一九一八年の夏には一石四一円六銭になったという（片山［二〇一二：一五四］）。

私は中学校か高校で米騒動のことを習った時、「讃岐はどうやったんな？」と祖母に尋ねたことがあったが、「あったけど、うちはあんまり困らんかった」と言っていた。泰田の本家は田んぼを持っていたから、米を収穫すると俵に詰めて牛車を引いて中津賀のうちまで運んできてくれたのだ。後は、近所の米穀商の平田屋さんに米を脱穀してもらえば、米に不自由はしなかったのだ。

だが、時の支配層は震撼したらしい。

彼らが知っていたかどうかはわからぬが、フランスでは、一七八七年夏の干ばつから始まった食糧危機は翌年も続き、食糧価格は五〇％上昇、パリのおかみさん達が騒ぎ出し、王妃マリー・アントワネットが「パンがないならケーキをお食べ」と言ったとか言わないとかで、一七八九年のフランス大革命が勃発している。

閑話休題、片山によれば、米騒動は「未曾有の大暴動だった。国家は恐怖した。とりあえず今回は収まった。しかし、米不足か米価の暴騰が繰り返されれば、国家が生き延びられる保証はない」（片山二〇一二：一五七）。

（しおた　みつき／アジア経済研究所　貧困削減・社会開発研究グループ）

《参考文献》

●片山杜秀［二〇一二］『国の死に方』新潮社。